

東京の住宅地における住民階層の比較研究

吉田 啓子

大学に入学して初めて東京に住んでみて、何の先入観もなしに自分なりに住宅地について感じる場所があった。東京都区部の“山の手”と称される地域でも住宅地としてかなり違いがあるように思えた。住宅地のうち“一流の住宅地”や“高級住宅地”というのはどのような社会階層の人々が居住しているのであろうか。またそれらの住宅地はどのように分布し、どのように形成されていたのであろうか。これらを明らかにすることがこの研究の目的である。

研究の方法としては、まず都区部の住宅地のうち山の手の特徴を調べる。その分析には昭和45年と昭和55年の国勢調査と昭和43年と昭和53年の住宅統計調査を使用する。次に上の分析結果から山の手を通る2つの私鉄を取り上げ、その沿線地域の住民特性の傾向を調べる。その分析には東京都町丁目別国勢調査報告書を使用する。そしてその分析結果からそれぞれの沿線地域の中で特徴ある町丁目を取り上げ、住宅地としての開発の過程を明らかにする。

以上の方法で研究を進めていった結果、“山の手”地域の中で東急東横線の沿線地域64町丁と西武池袋線の沿線地域80町丁をとり上げ、8変数（老年人口比、大学卒業率、役員比、1世帯あたり人員、1人あたり畳数、持家率、10年以上居住者率、過去5年以内居住者率）を使用して各沿線ごとに平均値・標準偏差を求め、それをもとに

4段階に分類し、分布図を作成した。以上の分析から、大学卒業率、役員比、1人あたり畳数、持家率等が概して平均より高い、いかえれば相対的に豊かなホワイトカラー的な階層が多く、広い自分の家に住んでいるというような町丁は、東急東横線では学芸大学駅を境に南西側、西武池袋線では向山3丁目、西落合にみられることが明らかになった。

そこでそれらの地域の開発の過程を明らかにしたところ、東急東横線では学芸大学駅南西側の目黒区旧碑倉村地域、西武池袋線では練馬区向山3丁目の両地域とも、自然発生的に出来上がった街ではなく、計画的に造られた住宅地が多いということが明らかになった。目黒区旧碑倉村は田園都市会社（現東京急行電鉄）の土地開発と周辺の地主による耕地整理により住宅地としての基盤が造られた。また向山3丁目はセカンドハウスとして意識の高い人々により開発された。つまり、現在いわゆる高級住宅地といわれている街、すなわち最終学歴が大学以上で、現在会社役員などをつとめ、家は持家で間取りも広い、というようなホワイトカラーが多く住んでいる地域は自然発生的に街が出来上がったのではなく、計画的に造られたものであり、また、人々がそこに住み始めた当初からすでによい環境にあったということがわかった。

那珂湊市阿字ヶ浦周辺の風成地形に関する考察

吉野 喜久子

風成地形とは本来風食地形と砂丘の両方をさすものなのだが、湿潤で植被の多い日本では風食地形の発達が悪く微地形的にしか存在しない。ただ

しそれらは発達が悪いゆえに形成過程が研究しやすく、小規模で長く保存されないから一般の地質学的尺度では研究し難い沖積世以降の地形発達史、

気候変化史にとって意義ある資料となりうる。私の卒論は茨城県那珂湊市阿字ヶ浦周辺に見られる種々の風成地形について特に風食地形を中心としながら調査し、さらに形成過程について考察を加えたのである。調査の結果は次の3点にまとめられる。

①フィールド内の平野は下末吉海進期に海底で形成された見和層による台地面で、約25mの海食崖をもって太平洋に臨んでいる。この崖下の浜田付近には一列の横砂丘が発達し、北の射爆場跡地内にはかつて横砂丘があったと思われるヤルダンが残っている。ヤルダンは主として北東—南西方向に分布しており、横砂丘を破壊したのが北東風であることを示している。この横砂丘から削られた砂は後方に飛ばされ、射爆場跡地内の台地面を広くおおっている。

②見和層は砂層であり風食を受けやすいので、海食崖には深さ5～8m、長さ50～200mの規模のプロウアウトが幾つも形成されている。開口部が北東を向いていることから、おそらくこれも北東風によって形成されたと考えられる。このうち阿字ヶ浦北部から射爆場跡地内にかけてのものは、かなりの部分を前述した海岸砂丘からの飛砂で埋められている。また阿字ヶ浦町のプロウアウトの後方には必ずヘアピンデューンが存在するが、これは削られた砂が堆積したものと思われる。比高は5m以下で砂の腐食はかなり進んでいる。射爆

場跡地内では内陸部も海岸からの飛砂におおわれ、こうした見和層起源の砂丘の分布状態はわからない。

③阿字ヶ浦町北部や射爆場跡地内の台地上には、海岸からの飛砂によって形成されたコースタルブロウアウトデューンやヘアピンデューンがかなり発達している。前面にあいたブロウアウト（砂丘の前面にできるもので、崖端ブロウアウトとは異なり見和層を削っていない）の方向からいって、これらの砂丘も北東風によって形成されたと推測される。砂はあまり腐食が進んでおらず白っぽい。

こうした風成地形の形成時期についてだが海岸砂丘が形成されたのは少なくとも縄文海進最盛期以後であり、崖端ブロウアウトはそれ以前、海岸からの飛砂による台地上砂丘はそれ以後であることが調査結果より明らかである。ところでこれらの風成地形形成に大きく関与している北東風はオホーツク海高気圧の張出しが主たる原因であり、今よりいくらか寒冷な時期の方が吹く頻度が高く強風であったと思われる。このことから崖端ブロウアウトの形成はヴェルム氷期から縄文海進期までの間で、特にシベリア高気圧の影響が弱まりオホーツク海高気圧が張出しやすかったと考えられる移行期、海岸砂丘が破壊され台地上に吹き上げられた砂によって砂丘が形成されたのは今から3000～1500年前の寒冷期と推測される。

リマ大都市圏の内部構造

松永淳子

1950年代から激化した農村から都市への人口移動は、首都リマへの過度な人口集中を招いた。リマは、これによって物理的に急速に拡大したが、それは都市の低所得者によって都市周辺部に形成されたバリアード（不法占拠スラム）の拡大に象徴される。通常の都市化理論にあてはまらない、ラテンアメリカ的な都市化によって形成された都市の一事例として、リマをとりあげ、その内部構

造を、都心部を取りまく住宅地域の社会的特性を中心に分析し明らかにするのが本論文の目的である。

分析に先立ち、まず、ラテンアメリカ全体での都市化の特徴を把握し、その中でペルーの位置づけを行った上で、ペルー国内での都市化過程における人口移動のメカニズムを、社会経済構造の側面から説明し、具体的なデータを提示しながら、